

2. 網野銚子山古墳築造の謎とその存在意義

三浦 到

1 記紀に見えるタニワ（丹後）王国とヤマト王権との関係

古事記や日本書紀には、初期ヤマト政権の天皇とタニワの媛たちとの婚姻に関する多くの記事がみえる。日本古代の文献史学では、初代の神武天皇後の二代綏靖天皇から九代の開化天皇までの八代の天皇は「欠史八代」と呼び実在しなかったとするのが定説になっている。しかし、古事記の開化紀には、タニワの王統系譜に関する記事が多く記載されており、開化天皇も実在したのではないかと考えている。このような記紀の記事から類推すると、開化から崇神・垂仁・景行と続く初期ヤマト王権の時代が、タニワとの関係が最も強かった時期となる。

「丹後王国論」を最初に提唱した門脇禎二は、記紀に現れる開化天皇と旦波大県主由基理娘竹野媛との婚姻について、大和以外の日本列島各地の豪族の中で最も早く「倭王国」の王と政略結婚した最初の例であるとした。また、記紀で「大県主」の尊称がみえるのは「旦波大県主由基理」と雄略天皇の時代の「河内志幾大県主」だけであることや、古代の地方首長で固有の名が分かる最初の例が、竹野の由基理であると述べている。そして、その後も垂仁天皇と日葉酢媛姉妹との婚姻などタニワとヤマト王権との間に緊密な関係が続いたとし、タニワ王国の存在根拠の一つとしている。（門脇 2000）。

2 全国の巨大古墳の分布状況

丹後半島には日本海三大古墳とも呼ばれる3基の大型前方後円墳（蛭子山古墳・網野銚子山古墳・神明山古墳）が存在する。特に網野銚子山古墳と神明山古墳は全長が200 m前後と日本海地域の中ではずば抜けた規模を誇る。30年以上前の資料である『前方後円墳集成』によれば、全長が180 m以上の古墳を巨大古墳と仮定して、全国の巨大古墳の分布状況を見ると全部で49基が確認でき、府県ごとの分布は（表7-3及び7-4）のようになる。すなわち、奈良県21基、大阪府18基となり、その他の府県では岡山県と京都府に各3基、兵庫県・三重県・群馬県・茨城県に各1基の計10基となる。つまり、古墳時代の政治の中心地であった奈良県と大阪府以外の府県ではわずか10基が存在するに過ぎない。

また、巨大古墳が築造された時期は、3世紀中頃の箸墓古墳に始まり6世紀代までの約350年間である。そして、その築造年代は、おおまかに1・2期が前期前半（3世紀中頃～4世紀前半）、3・4期が前期後半（4世紀後半）、5・6・7期が中期（5世紀代）、8・9・10期が後期（6世紀代）に区分される。これらの内、前期古墳に限ると17基存在し、その内訳は奈良県に12基、大阪府と

表 7-3 時期・府県ごとの180m以上の前方後円墳の数

時期 地域	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
奈良県	1	2	7	2	6	2	-	-	-	1	21基
大阪府	-	-	1	1	4	2	8	1	1	-	18基
その他	-	-	1	2	4	2	1	-	-	-	10基
計	1	2	9	5	14	6	9	1	1	1	49基

表 7-4 奈良県・大阪府以外の全長 180m 以上の前方後円墳（単位：m）

古墳の 名称（府県）	全長	後円部			前方部			くびれ 幅	時期
		径	高	頂径	幅	長	高		
造山（岡山）	350 ～ 360	224	32.5	48 × 46	230	170	27	115	5期
作山（岡山）	286	174	24	30 × 35	174	110?	23	120	6期
太田天神山（群馬）	210	120	16.5	24	126	92.5	11.7	97	5期
網野銚子山（京都）	198	115	16	35.2	80	84	10	56	4期
五色塚（兵庫）	194	125	18	30	81	—	11.5	66	3期
両宮山（岡山）	192 ～ 200	104	21.7	23 × 18	124	90	22.3	75	7期
神明山（京都）	190	129	26	40	78	80	15	60	6期
御墓山（三重）	188	110	16	40	90	90	12	60	5期
舟塚山（茨城）	186	98	10	—	90	90	?	—	5期
久津川車塚（京都）	180	112	17	37	124	87	16	85	6期

（数値は、近藤義郎編1991・1992『前方後円墳集成』による）

京都府が2基ずつと兵庫県が1基となる。

次に奈良県と大阪府以外の10基の古墳の中では、丹後の網野銚子山古墳と神明山古墳及び播磨の五色塚古墳の3基が前期後半の時期で、それ以外の7基は中期の所産となる。そして、4世紀後半の古墳は、そのほとんどが奈良県に存在しており、その被葬者は時の天皇や天皇に準ずる権力者と考えられることから、同時期の網野銚子山古墳など3基の古墳も天皇陵に匹敵する権力者の王墓といってよいだろう。

それでは、数少ない巨大古墳がなぜ近畿地方の北端の丹後半島に築造されたのだろうか。

本稿では、丹後半島の地理的状況や朝鮮半島情勢との関係などから、この謎に迫ってみたい。

3 考古学から見えるタニワ王国とヤマト王権との関係

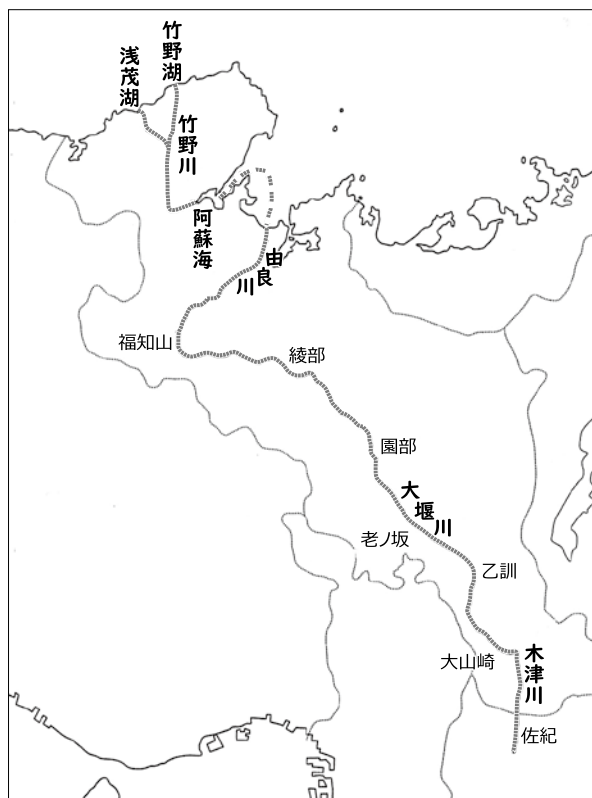
丹後は弥生時代から日本海を介して大陸や朝鮮半島との交流が進んだ地域で、（表7-5）に示すとおり鉄器やガラス製品など多くの文物をいち早く入手し、それら先進文化を元にタニワ王国が誕生し発展していったものと考えている。（京丹後市立丹後古代の里資料館2013）

以上のように、丹後が北部九州や出雲とともにこれらの先進文化を取り入れることができたのは、日本海沿岸には当時の船（準構造船）が航海可能な適度の距離間で潟湖が点在し、そこが港として利用できたという地理的条件が整っていたからである。丹後半島にも久美浜湾・浅茂湖・竹野湖・阿蘇海といった潟湖が点在しており、日本海交通の拠点的作用を果たしていたと考えられている。阿蘇海の北岸に位置する大風呂南1号墓（弥生時代後期後半）から出土した中国産ともベトナム産ともいわれ、また世界中でもこの1点しか発見されていないブルーのガラス釧（小寺2023）を例にして考えると、このガラス釧を積んで日本海沿岸を東行してきた船が丹後半島の北西海岸のいずれかの潟港に入り、そこから竹野川をさかのぼり、阿蘇海沿岸まで運ばれたものと考えている。その根拠としては、竹野湖から経ヶ岬を越えて半島を迂回する阿蘇海への航路は、風向きなどの気候条件や岩礁地帯が連なる地形的条件から難しく、弥生時代の船やその航海技術で進むことは非常に危険であり、大切な文物を運ぶのにそのような危険なルートは採用しなかったと考えるからである。

表 7-5 丹後の弥生時代の特徴的な遺跡

時期	遺跡名	特徴的な遺構	特徴的な出土遺物
前期後半	途中ヶ丘遺跡他	環濠集落	遠賀川式土器、陶埴、扁平片刃石斧や石包丁等の大陸系石器
	蔵ヶ崎遺跡他	水田水利施設	石鑿（半島製）・人面土器（温江遺跡）
前期末～ 中期初頭	扇谷遺跡	高地性環濠集落	鑄造鉄斧、ガラス塊、鍛冶滓、玉つくり関連遺物、陶埴
中期後半	日吉ヶ丘遺跡	環濠集落	鉄器材料と鉄器生産
	日吉ヶ丘墳墓	方形貼石墓	700 点の碧玉製管玉（中国の葬玉？）、水銀朱
	奈具岡遺跡	玉つくり工房群跡(96 基)	水晶玉つくり全工程に係る遺物、鉄針や鉄器材料、ガラス玉、緑色凝灰岩製管玉
後期全般	三坂神社墳墓群など多数	方形台状墓	大量のガラス玉（勾玉・小玉）、素環頭鉄刀（中国製）やヤリガンナ、鉄鏃等の鉄器 墓壇内破砕供献土器
後期後半	大風呂南 1 号墓	舟形木棺	水銀朱（中国産）、ブルーのガラス釧、13 個の銅釧、貝釧、11 本の鉄剣、玉類、漁具など
後期末	赤坂今井墳墓 第 4 主体（第 1 主体は未調査）	国内最大級の墳丘墓 舟形木棺	ガラス勾玉とガラス管玉（中国製）を連結した 3 連の頭飾りや両耳の垂飾り、水銀朱（日本産）、鉄剣、石杵、東方から運ばれた土器

また、これらの潟湖のうち北西海岸に位置する久美浜湾・浅茂湖・竹野湖と若狭湾側の阿蘇海とはその性格が異なっていたと考えている。そして、若狭湾側に位置する阿蘇海は、丹後半島以東の若狭や越や南のヤマト方面との往来を目指す船の起点の役割を担った港であったと考える。ヤマトへの具体的なルートとしては、阿蘇海を出港した船は由良川河口から南へ遡上し、福知山、綾部を過ぎて、大堰川（保津川）から桂川あるいは老ノ坂から乙訓の小畑川^{おばた}沿いに進み、大山崎の淀川との合流点で木津川に入って遡り、ヤマトへ至ったものとする（三浦 2021）。このルートの利点は、一部の区間で陸上輸送が必要であるものの、大半が河川を利用できることである。4 世紀以前の日本列島における物資の輸送手段として牛馬や車^{くるま}が使用されていた痕跡は見当たらず、唯一、船がその手段であった。



第 7-10 図 タニワとヤマトを結ぶ道

このような丹後の地理的条件の優位性を基礎にして、弥生時代後期後半から末にかけてタニワ王国が成立し、ときを同じくして邪馬台国の卑弥呼を共立して成立した倭国を支えた地域国家の一員としての地位を確立したのである。そしてこの関係は古墳時代へ入っても続き、丹後とヤマトを結ぶこのルート沿いでは、筆者の管見であるが、古墳時代前期における畿内と共通した文化

を持つ遺跡や古墳が以下のとおり見つかり、このルートの存在を裏付けてくれる。

まず、古墳時代前期に水のマツリを行った導水施設として丹後の^{あさごだにのみ}浅後谷南遺跡と山城の^{こひじり}小樋尻遺跡（城陽市）や^{かわらだに}瓦谷遺跡（木津川市）、次に腕輪型石製品と筒形銅器の威信財では、丹後のカジヤ古墳（筒形銅器、鍬形石・車輪石・石釧）と丹波の^{そのべかいち}園部垣内古墳（車輪石・石釧）並びに山城の乙訓古墳群の妙見山古墳（筒形銅器、車輪石）が共通する。そして^{おいのさかとうげ}老ノ坂峠に築造された山城の^{てんのうのもり}天皇ノ杜古墳は網野銚子山古墳の2分の1の相似墳である。また、5世紀段階ではあるが、「王者の棺」と呼ばれる長持形石棺が丹後の^{うぶすなやま}産土山古墳や^{はなれこ}離湖古墳などと山城の^{くつかわくるまづか}久津川車塚古墳に存在することも同義であろう。加えて、古事記に記された垂仁天皇の后妃候補の媛が「いと醜きによりて」タニワに返される途中で、木の枝からさがり死のうとした場所を「さがらか→相楽」、また淵に落ちて死んだ場所を「おちくに→弟国（乙訓）」との地名説話を伝えるのも、まさしくこのルート上での出来事なのである。

4 丹後の巨大古墳の築造場所と朝鮮半島情勢との関係

日本海三大古墳が丹後に築造された理由は、4世紀頃の倭国と朝鮮半島との情勢が大きく関わっている。当時、朝鮮半島では北の高句麗が南下政策をとりはじめたために、新羅や百済が大きな圧力を受けるようになった。はじめは、新羅と百済が一致して高句麗に対抗していたが、そのうち新羅が高句麗の勢力下にはいり、連合して百済を攻めるようになった。このため、百済は倭国に救援を求め、倭国は朝鮮半島に出兵することになる。岸本直文氏はこの半島派兵と三大古墳との関係性を次のように整理している。この時期に和泉の摩湯山古墳（200 m）や播磨の五色塚古墳（194 m）および丹後の三大古墳が築造されることを踏まえ、「大阪湾岸および丹後半島の動向は連動するもので、4世紀中頃以降の大阪湾岸及び丹後半島からの半島派兵を示すものと思われる。海上交通に長けた勢力を取り込み、半島に至る遠距離航海用の船舶を造り、大阪湾岸や丹後半島から派兵する体制が整えられたと推測する」と述べている（岸本 2010）。

1145年に成立した朝鮮の歴史書である『三国史記』『新羅本紀』（佐伯 1988）から、4世紀代の倭国と新羅との関係記事を抜粋すると以下のとおりとなる。

300年 倭国と交聘する

312年 倭国王、使者を遣わし、子のために婚姻を求める

344年 倭国、使者を遣わし婚姻を請うも、断る

345年 倭王、移書して絶交する（筆者注：移書とは書を送ること）

346年 倭兵、風島に来襲し、辺戸を抄掠し、さらに金城を囲む

364年 倭兵、大いに至る。倭人、衆を恃んで直進する。倭人、敗走する

390年 倭王、使者を遣わし、美海（末斯欣）を（人質として）派遣するように要請する。王、美海を倭に送る

393年 倭人、金城を囲む。独山に迫り、挟撃して大いに破る

このように「新羅本紀」によると、4世紀初め頃までは倭国との関係は良好であったが、4世

紀中頃から関係が悪化し、345年には両者の国交が断絶し、倭軍の出兵が開始されるのである。この頃が三大古墳が築造される時期にあたり、倭軍が丹後の潟港から出兵する船団の様子が想像できるのである。この派兵にあたっては、ヤマト王権から多くの兵が派遣されたことは想像に難しくなく、ヤマトを出た軍勢は多くの武器や食料等の物資を携えながら、ヤマトから丹後へ至るルートを通して、阿蘇海に入って上陸し、竹野川等を利用して倭軍派兵の基地（港）となった浅茂湖と竹野湖まで進み、船団を組んで半島へ向かったものと考えられる。これら三ヶ所の潟港を掌握していたのは、阿蘇海を蛭子山古墳の王、浅茂湖を網野銚子山古墳の王、竹野湖を神明山古墳の王といったタニワ王国の王たちであった。

特に、網野銚子山古墳と神明山古墳は潟湖を見下ろす台地上にあって、両墳とも古墳の主軸が海岸線と平行になるように北東―南西方向に築造された。葺石に覆われた巨大古墳の側面が日光に映えて光輝く威容を見せつけ、倭国の実力を誇示することを意図したもののだろう。

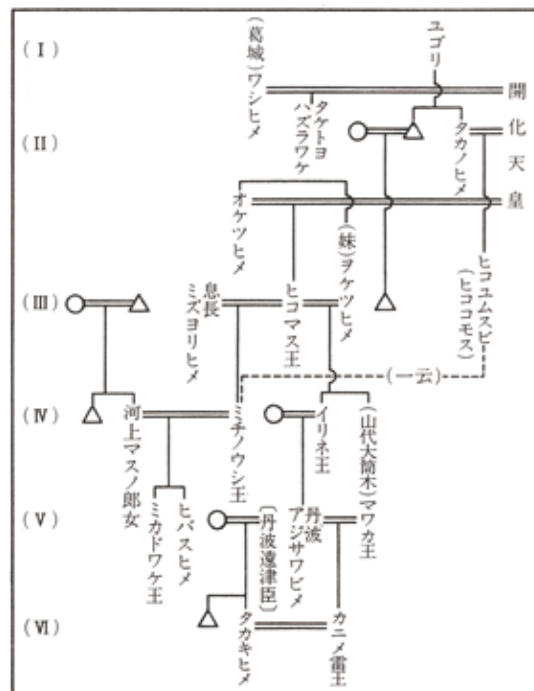
また、派兵したヤマト王権の王たちは、反対に高句麗や新羅の軍勢が反撃してくることを恐れた。高句麗と新羅の連合軍が反攻してくる場所は、倭軍の出兵基地である丹後半島であると想定してもおかしくはない。丹後半島からヤマトへの道を遡り、倭の都（ヤマト）へ攻めあがってくることを恐れたのである。このことも丹後半島の海岸線沿いに巨大古墳を築き、倭国の実力を見せつけ威嚇する目的があったのだろう。また、こののちヤマト王権の王墓が佐紀古墳群から大阪湾に近い古市古墳群へ移動することも連動した動きかもしれない。このことは、663年の白村江の戦いで唐・新羅連合軍に敗れた倭国が、半島からの侵攻に対処するため、北部九州から瀬戸内海沿いの各地に朝鮮式山城を築いたり、時の天智天皇が都をヤマトから近江に移したことも似ている。

さらに、興味深い説が対馬の高名な考古学者永留久恵によって述べられている（永留 2009）。「一略―（対馬の）北部が^{かみあがた}上県、南部が^{しもあがた}下県である。律令制になって「郡」が置かれた時、対馬は上県郡、下県郡となる。古代の国郡で、前・後、上・下というときは、京に近い方が前・上で、遠い方が後・下とされている。ただし、西海道では、大宰府を中心に前・後、上・下が決まっていたことからすると、対馬の上県郡、下県郡は逆になっている。しかし大宰府が設置される以前から上と下に分かれていたと考えれば、理に反することはない。それはヤマトと対馬の間の交通路が、河内から瀬戸内を抜けて玄海を渡るより、丹後から日本海を航して^{げんかい}玄海を越える方が近いわけで、（私も実感したことだが）本州の山陰の方から対馬を見れば、上県が下県より近く大きく見える。丹後の国府のあとにある歴史資料館で、その地の古墳から出土した柳葉形銅鏃を見て、それが^{けち}雞知の^{でいづか}出居塚の銅鏃と同類であることに示唆された思いは前述した。 一略―」（筆者注：京都府立丹後郷土資料館に展示されている岩滝円山古墳出土の銅鏃のこと）

永留のこの指摘は、朝鮮半島に最も近い対馬に住む人の実感として大変重要である。なぜならば朝鮮半島の人々も同様の理解をしていたらうことは想像に難くないからである。つまり、古代において朝鮮半島からヤマトを目指す場合、丹後半島に上陸するのが最も近いと理解されていたと考えられるからである。

5 網野銚子山古墳の被葬者像

丹後王国論の産みの親である門脇禎二は、記紀の記述から福田川を含む竹野川水系を支配した王の5代にわたる男系タテ系図を復原した（川上谷川水系と野田川水系にもそれぞれ2代のタテ系図を復原）。すなわち、初代が且波大県主由基理で、2代目が由基理の娘竹野媛の兄か弟、3代目が彦湯産隅命（開化天皇と竹野媛の子）、4代目が丹波道主命（彦湯産隅命の子）、5代目が朝廷別王（丹波道主命と河上麻須郎女の子）である。この系図の中で筆者が網野銚子山古墳の被葬者として注目しているのは、朝廷別王である。



〈参考〉門脇禎二 1986『日本海域の古代史』より転載

朝廷別王は6人姉弟の末っ子で長女が垂仁天皇の後となる日葉酢媛であり、記紀の中で日葉酢媛ほど多くの事績が書かれている女性は、景行天皇以前ではほかにいない。また、網野銚子山古墳と同型墳である佐紀陵山古墳は宮内庁では日葉酢媛陵に治定されているほか、筆者も佐紀陵山古墳の埋葬施設である竪穴式石室が一部に長持形石棺の部材を使った特徴ある埋葬施設であることと日葉酢媛の葬儀に関連した記紀等の記述が符合することから、被葬者を日葉酢媛であることを論じた（三浦 2015）。

そして、岸本直文氏が本報告書で述べているとおり、佐紀陵山古墳をもとにして銚子山古墳が築造されたとすると、両方の被葬者同士の強い結びつきが考えられ、銚子山古墳の主は門脇がタニワ王国の5代目の王として復元した朝廷別王である蓋然性が高いといつてよいのではないだろうか。

参考文献

門脇禎二 2000『古代日本の「地域王国」と「ヤマト王国」』上 学生社 64-81 頁

岸本直文 2010「倭国の形成と前方後円墳の共有」『史跡で読む日本の歴史2 古墳の時代』吉川弘文館 14-46 頁

京丹後市立丹後古代の里資料館 2013『丹後王国の世界』京丹後市立丹後古代の里資料館展示図録

小寺智津子 2023『ガラスの来た道』吉川弘文館 158-162 頁 185-189 頁

佐伯有清 1988「朝鮮三国・倭・日本関係年表」『三国史記倭人伝』岩波文庫から一部抜粋 232-233 頁

永留久恵 2009『対馬国志』第1巻 原始・古代編 174 頁

三浦 到 2015「佐紀陵山古墳の埋葬施設と被葬者について」松藤和人編『森浩一先生に学ぶ 森浩一先生追悼論集』同志社大学考古学シリーズXI 305-316 頁

三浦 到 2021「丹後の古代史に関する一試論～丹後半島の船曳道から見える古代の姿～」『太邇波考古』第43号 両丹考古学研究会 1-12 頁